

展示室と収蔵庫をいかにつなぐか ―学芸員のお仕事―

倉石あつ子(文学部教授/花蹊記念資料館館長)

はじめに

博物館施設にはさまざまな機能を備えた博物館・資料館があり、呼び方が異なるように自ずからその役割も異なる。博物館の条件は「博物館法」によって定められているので、その条件を満たした館が博物館として認められる。「博物館法」第二条によれば博物館とは、《歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む。以下同じ。)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をする》施設ということになる。

こうした条件に当てはめていえば、花蹊記念資料館(以下 資料館)もその名称のとおり、学祖跡見花蹊先生(1840～1926)および跡見学園ゆかりの資料を収集し、調査・研究し、その成果を教育に活かすと同時に広く一般の人々に公開し、利用に供するということが館に求められている使命である(学校法人跡見学園組織規程 第二十一条参照)。

いわば本館に収められている資料は、ある意味で学祖を検証するためのものであると同時に、学園の歴史や意志などが集約されているものであるともいえる。さらにそれらの資料を広く一般の人々に公開することによって、教育、歴史、美術、芸術、女性研究などのさまざまな研究分野に寄与していると捉えてよいだろう。研究者からの問い合わせによって資料提供をしたり、刊行物を送付することもある。今年度の事例でいえば、栃木県小山市立車屋美術館での「近代の南画」展に花蹊先生の作品および黒田清輝の花蹊像を貸し出している。黒田清輝の花蹊像は今まで門外不出とされていたが、理事長以下大学側の判断により、初めて大学外での展示に踏み切った。収蔵しているものを一般の公衆の利用に供するということは、近年どこの館にも求められている役割であるからである。

本稿では、こうした日々の資料館活動の中でも特に資料館の根幹をなす、1. 資料収集 2. 展示と調査・研究 3. 保存と管理という点に絞って、あらためて館の活動を報告し、そのあり方を考えてみたい。

1. 花蹊資料館の資料収集

資料館収蔵の品は花蹊先生ご本人に関わる物、次の世代の李子先生に関わる物・李子先生の養子(花蹊先生の養孫)純弘氏に関わる物、跡見家ゆかりの人々に関わる物、学園の教職員・生徒・学生に関わる物、その他に分けることができる。そしてこれらの多くが、跡見家から寄贈された物を中心として、毎年さまざまな方がさまざまな品を次々と寄贈してくださることが多い。140年にならんとする跡見学園の歴史の中で培ってきた人と人とのつながりの中から生まれ得る行為であり、館にとっては誠にありがたいことである。毎年、多くの品が寄贈されているが(もちろん、館の予算で購入している物も数点含まれる)、そうした中には花蹊先生の書や絵画もみることができる。

たとえば、本年度学園関係者から寄贈された掛け軸は、花蹊先生が描いた扇面が含まれる。草花が描かれ落款が押され、大正五年の記述がある。大正五年といえば、花蹊先生の喜寿の祝いが催された年で、盛大な祝宴が開かれ大隈重信を初めとする来賓が祝辞を述べている。花蹊先生はこの宴を開いてくれたことに対する返礼として、学園に対しては朱文公の勸学文「勿謂今日不学而…」(写真1)を寄贈されている。勿論これは軸装(草仕立て)にされており、本紙の周囲の中回しの部分には、花蹊先生が三十年来お召しになられた羽織の裏地が用いられている。裏地の模様は壽の字を模様化したもので、今もその色は花蹊先生のお召しものの好みを偲ばせる落ち着いた色合いを見事に伝えている(写真2 部分)。

一方、一般の参会者には扇面(実際には扇子だった可能性が高い)がお返し品の品として配られたのではないと思われる。寄贈された扇面の軸装は、上記のお祝いのお返しではないかと思われるが、来歴は更なる調査が必要である。金地の扇面に花蹊先生が伸びやかな筆遣いで草花が描かれている。いただいた方が軸装にしたものと思われる。(写真3)

この由緒に関しては、まだ十分な調査がなされていないが、ともかく多くの方々に見ていただきたいという資料館側の意図で、1月8日の賀詞交歓会の折、金屏風の前にケースに入れて飾られた。跡見純弘氏からは「李子がどなたかに差し

上げたものだろう」というお話をいただいたが、これを証明するためにもご寄贈いただいた方からその由来をお聞きする必要がある。この例のように、兼ねて収蔵されていた品を説明する意味でも、今回寄贈された品を調査することによって、更に詳細な情報を付け加えることができる場合がある。こうした調査は、勿論学芸員の重要な仕事の一つである。寄贈された資料の多くは、その時由来がわかっているものもあるが、さらなる調査が必要となる場合が多いのである。収集された資料の調査・研究については次節で述べることにする。

また、本年度は跡見純弘氏からはアルバムやご自身が応召された折の寄せ書きのある国旗（絹地）・絵はがきなど600点ほどの品を寄贈していただいた。アルバムに貼られている写真については、ご本人に聞き取り調査をすることによって、1点1点確認をしていく作業がこれから進められていく予定である。こうした作業を進めることにより、学園の歴史の一端がより明らかになる部分もあり、また花蹊先生や李子先生に関わる新しい情報なども蓄積されていく可能性もある。そして、それらの中の何点かは学園史や特別展などの機会を作り、多くの方々に紹介し公開された資料として活用していただければと願っている。

寄贈された資料を収蔵庫に収蔵しているだけでは、宝の持ち腐れというものである。資料調査を速やかに行い、新たな収蔵品はなるべく早く公開に努めることが資料館の使命の一つであろう。

2. 展示資料と資料調査・研究

資料調査・研究の本論に入る前に、本館での資料展示はどのように行われているか、簡単に触れていきたい。年間の展示計画および内容は表1のようになっている。資料館には第一展示室と第二展示室があるが、本館では常設展示を主として第一展示室で、企画展を第二展示室で行っている。どこの博物館もそうであるように、常設展は館の顔と言ってもよい。本館では3月末の桜祭りから4月の入学式にあわせて跡見学園の歴史と花蹊先生の紹介を兼ね、学園の歴史展示を行っている。この展示こそが本館の顔を展示する時である。先に述べたように、資料館の収蔵庫には跡見家や各方面から寄贈された品々が収蔵されている。これらをフル活用して入学式の展示に何をどう展示するかを考えるのは、学芸員の本領を発揮する場である。

古い写真からは創立当時の生徒の面々を知ることができるし、それを知ることによって本校が明治期の女子教育の中でどのような位置を占めていたかも分かる。よく目にする花蹊先生の小桂（写真7 参照）なども収蔵されており、「花蹊日記」などの文献資料と突き合わせることによって、花蹊先生の行動とモノが結びついた展示ができる。写真は単なる写真でなくなり、ある時代のある状況を再現し、私たちの前にさまざまな想像を掻き立てる立体的なモノとなって顕れることになる。収蔵庫に収蔵されているモノ



写真3 渥美財団渥美伊都子氏寄贈 扇面 (2013年1月8日 賀詞交歓会)



写真1 朱文公勸学文の軸装

身ごろと衿部分でもはぎあわせられたものであろうか、よく見ると模様のずれが見られる



写真2 中回しの生地 壽

は、単なるモノではなく、生きたモノとして展示室に出ていくことができるということである。

こうした展示を心がけるためにも、収集された資料の整理および調査は早急にされるのが望ましいが、それには人力が必要となる。展示がマンネリにならぬよう、そして何を伝えたいのかが分かる展示を心がけるためにも、資料調査は基本作業であり、そのための技を身につけていくのが学芸員であろう。展示に際しては収蔵庫にどのような資料があるのかをよく心得ていなければならず、それができていれば資料をフル活用して、マンネリ化を防ぐこともできる。

花蹊先生の生涯と学園の歴史とがどうかかわってきたかという紹介は重要だが、それだけでは同じような展示になってしまう恐れを招く。忘れてならないのは、花蹊先生は明治初期からの女子教育の第一人者である。その花蹊先生の、女子教育の特色とされる部分をどう展示するか。それらを視覚にどう訴えるかは、大いに工夫が必要な部分である。資料館の顔は、常設展示にあるといったが、「花蹊記念」と名乗る以上、教育の面まで踏み込んだ展示を企画していくことが大切である。さらには、それをどう活用させるか、活用してもらえるか、を念頭に置いた展示こそが大学という研究機関に付属する施設である花蹊記念資料館の使命であろう。

学生の履修科目に社会人形成科目として「跡見花蹊の生涯」が設置されていて（註1）、4月当初に履修生は資料館を訪れ展示を見学するよう勧められている。しかし、この5月末日までの展示内容が、講義内容を補完するようなものになっているのか否かという検証はあまり行われておらず、この科目との補完関係を見直す必要がある。

資料館に足を運ぶことによって、講義の内容を眼で確認できるような展示になっていれば、授業に資料を提供できるという役割を果たすことができる。また、学生もおのずから足を運ぶであろう。このへんの補完関係は、授業担当教員と連携をとりながら、工夫していく必要がある部分でもある。中高の展示ホールの活用にも、同様のことが言える。

表1の網かけ部分は、学生の作品やOGの方々も参加した展示である。これらは、授業成果の発表の場という位置づけを館が果たしているが、授業担当者の協力も大きい。学内の教員との連携により、この部分は更に充実したものとすることができるし、今まであまり展示しなかった分野（陶芸・彫刻の展示・グラフィックデザインなど）の展示も可能となってくる（写真4・5）。



写真4 平成24年度 学芸員実習の成果展示 (歴史民俗系展示 昭和40年代を再現)



写真5 平成24年度 学芸員実習の成果展示 (美術系 世界のさまざまな龍)

表1 平成24年度跡見花蹊記念資料館展示計画

期間	第1展示室	第2展示室
4月3日(火)～5月31日(木)	学園創立者跡見花蹊の横顔	平成24年 桜まつり 花蹊記念資料館・図書館共催企画 桜の本と標本展
6月16日(土)～7月31日(火)	第4回 アトミ・アート展	跡見学園女子大学花蹊記念資料館コレクション展 第1期
9月26日(水)～11月4日(日)	跡見 廉書会 第6回OG作品展	跡見学園女子大学花蹊記念資料館コレクション展 第2期
11月21日(水)～12月22日(土)	中国宋代絵画展 -原寸大複製による-	跡見学園女子大学花蹊記念資料館コレクション展 第3期
1月22日(火)～2月4日(月)	博物館実習生による模擬展示	
3月22日(金)～3月30日(土)	学園創立者跡見花蹊の横顔	小企画：桜まつりにあわせて 新コレクション展2013

大学に付属する資料館として学生や教員、地域の人々への公開に向けての展示を心がけてきたの言うまでもないが、跡見学園中学校高等学校との交流なども視野に入れれば、展示の内容は更に広がり、かつ充実していくものと思われる。実は、こうした諸分野の展示を行うことによって、花蹊先生の教育の理念部分だけでなく、「技」の教育の伝達継承を主張できることも可能となるものと思われる(註2)写真6)。



写真6 跡見学園中学校高等学校に保存されている生徒の合作作品(文部科学大臣賞受賞作)

展示内容の充実を図るためにも、収蔵資料に対する経常的な調査・研究は必須である。購入した資料にせよ寄贈された資料にせよ、その資料の作者・制作年・由緒(来歴)・資料価値などは、基本的情報の収集・研究であり、展示のための基礎資料となる。こうした資料収集と調査研究は、循環的な行動として行われるべきものであり、その結果はなるべく早く利用者に公開し還元していかねばならない。これは学問的に資料収集した場合、どのような分野にも当てはまることであり、収集した資料を「私蔵する」ことは研究者(勿論、学芸員もこの範疇にはいる)としては許されない。そのためには、学芸員のネットワークの良さも要求される。花蹊先生に関する資料は、あちこちに散在しており、それらを見・聞き取り調査することによって、当館に収蔵されている資料の研究が進む可能性大だからである。そのための資料収集計画をしっかりと立て、それにのっとった調査・研究が進められていくことも必要である(註3)。

3. 収蔵庫と展示室を結ぶ

当館に収蔵されている資料は、材質的に多岐にわたる。紙類だけでも和紙・洋紙が混在し、絵画も日本画・油絵などがある。額に入れられた絵画もあり、屏風仕立てになっているものもある。屏風仕立てあり、軸装ありという具合である。茶道を正課に取り入れていた花蹊先生らしく、木箱に収められた天目茶碗・煎茶茶碗などもある。

漆器類も多い。中には写真7で有名な小桂も保存されている。昭憲皇太后から下賜された小桂と伝えられている。布製のものとしては、このほかにも中高の制服やコート・学生鞆や用務員さんが着ていたらしき桜の校章入り法被など



写真7 花蹊先生の小桂(大正8年)『跡見花蹊女史傳』口絵写真より

も保存されている。これら、材質の異なるものは、もちろん一様な温度・湿度管理で良いかといえば、そうはいかない。

一般的に収蔵庫や展示室の温度は摂氏18度から20度、湿度55%前後で保たれることが望ましいとされている。館の収蔵庫は、現在、空調を切り、温度は20度前後に保たれているが、湿度は30%前後と乾燥状態にある(季節により、これがどう変化するかは更に継続して注意していく必要がある)。この乾燥状態は紙にも布にも漆器類にもよくない。加湿器の使用も考えられるが、布製品に湿気が含まれすぎると、カビの原因にもなる。防虫剤などの使用ももちろんだが、それぞれの材質により使用する防虫剤も異なる。出来得ることなら、これら材質の異なるものを別々に保存することが望ましいし、布製品は桐たんすなどの利用が望ましい。今後、美術館等に勤務経験のある教員の知恵などを借り、さらなる保存・管理の工夫が必要となろう。

カビや虫の予防策として、それらを館内や収蔵庫に持ち込まないことであるが、人やモノが移動すれば当然虫やカビも移動するから、予防と言ってもなかなか難しいのが現状である。したがって、虫やカビ予防のためにも、定期的な清掃・燻蒸などが必要である。そして、何よりも学芸員の定期的な資料点検が、収蔵品の損傷の早期発見につながる。早期発見、早期治療は、収蔵庫に保管されているモノをイキモノとして展示するためにも学芸員の重要な仕事の一つといえる。

註1 社会人形成科目「跡見花蹊の生涯」は全学共通科目の中の一つとして設定されており、1年生全員が履修することになっている。この科目が設置された当初は山崎一穎氏(現理事長)が担当。理事長就任を機に現在は嶋田英誠氏(常務理事)が担当している。

註2 一つの試みとして、文京キャンパスで開催されるオープンキャンパスの折に、6階のスケルトン教室と7階に通じる大階段を使用して、学生たちの作品の出張展示を試みた(写真8～10)。訪れた高校生およびその保護者たちは、その展示を見て「こんなことも大学でできるんだ」と強い興味を示しながら見て行ってくれた。ちなみに、当日の説明役は大学院日本文化専攻の学生が務めてくれた。

註3 幸いにして跡見学園の130年史が刊行されており、その助けを借りることができる。



写真8 文京キャンパス出張展示
6階スケルトン教室 書の展示



写真9 文京キャンパス出張展示
7階への大階段 絵画展示



写真10 文京キャンパス出張展示
7階への大階段 11月には十月桜が咲いた